

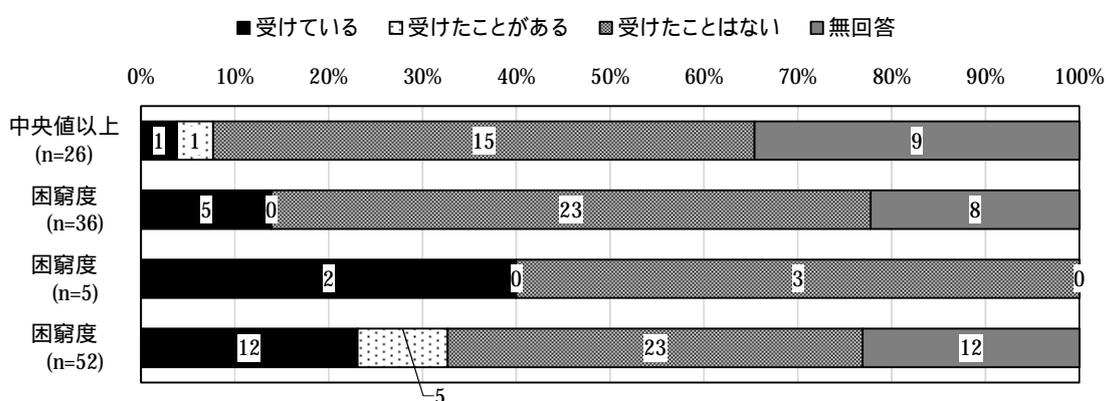
大阪狭山市子どもの生活に関する実態調査報告書正誤表

大阪狭山市子どもの生活に関する実態調査報告書を次のとおり訂正します。

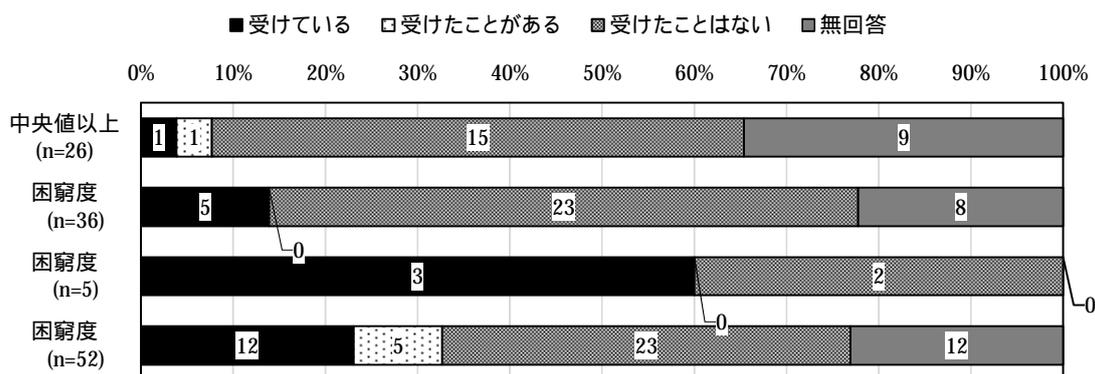
平成 29 年 6 月 16 日 大阪府立大学

P146「図 129 の補足図 困窮度別に見た、養育費（ひとり親）」を次の通り訂正します。

（訂正後）



（訂正前）



P157 < 家庭状況に関する考察 >

社会保障制度の利用状況について、特に困窮状況と子どもに関連する制度に着目すると、就学援助制度の利用率は、困窮度 群で 59.8%、 群において 52.9%となっている。生活保護制度を現在「受けている」と回答した割合は、困窮度 群以外におらず、困窮度 群で 4.9%である。ただし、困窮度 群において「無回答」の割合が 47.1%と高いため留意が必要である。ひとり親世帯対象の児童扶養手当の受給率は、困窮度 群で 78.8%、 群で 60%となっている（ただし、ひとり親世帯のサンプル数自体が少ないため数字の評価には留意が必要である）。それぞれの制度の支給要件が異なる基準ではあるが、制度の周知を図り、困窮層が確実に制度につながる仕組みづくりが求められている。公的な給付ではないが、ひとり親世帯に関連する養育費の受給状況を見る。困窮度 群は ~~23.0%~~23.1%、困窮度 群は ~~60.0%~~40.0%となっている。各家庭の諸事情に配慮しながら受給率を上げる取り組みの必要性が示されている。

P274 10 行目

困窮度 群は ~~23.0%~~23.1%、困窮度 群は ~~60.0%~~40.0%となっている。各家庭の諸事情に配慮しながら受給率を上げる取り組みの必要性が示されている。

P195 <健康に関する考察> 以下の内容に差し替えます。

困窮度別に朝食の頻度を見ると、困窮度が高まるにつれて、「毎日またはほとんど毎日」と回答する割合が低くなり、困窮度 群では約7割となっており、大阪府内全自治体と比べ10ポイントほど下回っている。「週に1回程度」、「食べない」をあわせた割合は、困窮度 群で11.8%、困窮度 群で4.9%と、困窮度 群が高い結果となった。就労状況別に朝食の頻度をみると、非正規群で69.2%と最も低い結果となった。食生活と困窮度、および保護者の雇用環境との関連が示されている。

子どもの心身の自覚症状について、困窮度 群に注目し、高い割合を示した項目を挙げると、「やる気が起きない」32.4%、「不安な気持ちになる」25.5%、「イライラする」「よくおなかがいたくなる」どちらも24.5%など、心理的・精神的症状の高さが特徴的である。こうした心理的・精神的症状が学習状況に影響を与えていることが推測される。さらに、困窮度 群においては、「歯がいたい」という回答が8.8%と他の群と比べて突出して高いことも特徴的である。

困窮度別に心身の自覚症状（保護者）を見ると、多くの項目において、困窮度が高まるにつれ、心身の自覚症状のそれぞれの項目の割合が高くなっている。特に、困窮度 群に着目して、中央値以上群との差が大きい順に挙げると、「ねむれない」20.6%（中央値以上群に対し3.1倍）、「よくかゆくなる」13.7%（3.1倍）、「不安な気持ちになる」40.2%（2.3倍）、「ものを見づらい」12.7%（1.9倍）、「よく腰がいたくなる」38.2%（1.8倍）となっている。また、「不安な気持ちになる」に加え、「まわりが気になる」16.7%（1.4倍）、「イライラする」35.3%（1.2倍）と心理的・精神的状況への影響もみられた。

困窮度別に生活を楽しんでいるかを見ると、「とても楽しんでいる」「楽しんでいる」をあわせた割合では、中央値以上群で77.8%ともっとも高く、続いて困窮度 群で73.7%となった。ここでは、困窮度 と困窮度 群では逆転し、困窮度 群が65.7%、困窮度 群において、58.8%ともっとも低くなった。逆に、「楽しんでいない」と回答した割合は、中央値以上群が2.2%ともっとも低く、ついで、困窮度 群で2.9%、困窮度 群で3.4%、困窮度 群で8.8%となった。

定期的な健康診断の有無について困窮度が高まるにつれて受診率は低下している。中央値以上群が74.1%と最も高く、困窮度 群54.1%、困窮度 群41.2%、困窮度 群で44.1%となっている。

P274 下から2行目

「週に1回程度」、「食べない」をあわせた割合は、困窮度 群で ~~41.7%~~11.8%困窮度 群で4.9%と、困窮度 群が高い結果となった。